
限りなく透明ではない

日句狸雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

限りなく透明ではない

【Nコード】

N5461B

【作者名】

日匂狸雨

【あらすじ】

突然の事故で死んでしまった主人公。死後の世界を経てどうにか生まれ変わったのだが、どうやらそれは始まりですらないという。

第一話

俺は、落ちているのか。

この状況——全くの異質である、この空間。

例えばようならば、宇宙——つまり、あの一つの世界から全ての光を集約させたような。

文字なんかでは表現しきれないかもしれないが、クリスタルクリア——なんて言葉がそれに近いかもしれない。

全く、この状況を理解するのにどの位の時間がかかるのだろう。いや、まさか、これを理解できる者なんている筈がない。

これは、夢なのだろうか。

落下してゆく身体は、自身の存在以外、空気さえも知覚できない。無。

芽生えたある種の恐怖は、自我を持つものならば何者でも抱く感情、「死」に対する恐怖にも似ていた。

まだ薄暗いが、ほのかに明るい。どうやら朝になったようだ。

カーテンの隙間から陽光が差し込んで、寝ている顔に直撃。じわじわと顔が熱くなり脳が急激に活性化化する。次の瞬間には、枕から頭が切り離された。

「ぬう……。」

目をこする。痒いな。

結局、かなり速めのストロークで……右目に関してはやりすぎたと思う。

そして、目を開ければ、いつも通りの増えすぎってしまった雑誌の大

きな山が見えた。

長期休業を目前にしてこの様。よくもまあここまで溜まったものだ。これは生活を見直す必要がありそうだな。あ、それができないからこうなってしまったのか。

数秒、沈黙しながら辺りを見回す。

すると突然、

「やばい！ 今日も学校あるんだった！」

どうやら、今日を土曜日だと思い込んでいたようだ。

学校があるとはいっても、明日からの年度末休業―春休みに際しての諸注意や、今までの経験上、長くなると予想される、「校長先生のお話」を聴いているだけでいい。

時間にゆとりがないのにも関わらず、それを感じさせない丁寧な動きで準備を済ませる。ドアを開けようとしたがノブが見つからない。

「襖か……」

階段を降りる途中、つまづいてしまったが、なかなか順調？ に家を出ることができた。

「今日は朝食なしでいいか。あ、いまさら遅いか」

つぶやいていると、そこへ、

「広瀬君おはよう！」

広瀬は俺のことだ。

「ああ、おはよう」

とりあえず、同じ高校一年の、親友である三浦夕太にあいさつを返す。

あまり気はすすまないが学校へは走って向かえば、どうにか遅刻はせずに済みそうだ。

第一話（後書き）

細かい設定は次話で書くと思います。

08 9 / 3 若干量加筆、修正しました。

第二話

今時、「太郎」なんて、全く変哲のない名前、否、それが逆に個性とも

いえるが……。それでも、周りからは、「あだ名がわからない」云々いわれる

こともある。両親は一体、何を思い、この名を付けたのか。以前から理解し

かねていた。

それが多少、広瀬太郎のコンプレックスになっていたのを、知ってか知らずか、

親友の三浦夕太は、彼のことを「広瀬」と、名字で呼んでいた。

「なあ、広瀬」

「ん、何だ？」

「今から走らないと間に合わないんじゃないかなかったのか？」
夕太がたずねる。

「ああ……」

生返事。

「ああ、じゃないだろ。走るぞ！」

少々、焦った様子で広瀬を促す。

「うむ……」

二人は駆けだす。

もう、道には二人以外の学生の姿はない。

二人は息を切らしながら疾駆している。

途中、道路を横断しようとした時、車からはねられそうになったが、なんとか到着。そして、沈黙。

いつもなら開いている校門だが、この時ばかりは、侵入者を迎えるがごとく、

固く閉ざされている。

「間に合わなかったか…。」

夕太が落胆して言う。

「よくある事だろ？そこまで落ち込むなって」

慣れた様子で、軽く答える広瀬。

「とにかく、行くぞ」

広瀬は教室に向かっている。

途中の廊下で、担任と八合わせしてしまった。

いまのところ五分遅刻。だが、何も言われなかった。元々、こういう事には関わってくれないタイプらしいのだが、それでも、

初めて遅刻した時は、愕然とした表情をしていたのを憶えている。

教室には誰もいない。

荷物をロッカーへぶち込む。二人は体育館へ急いだ。

校長の話が、単調な音の連続に思えてくる。広瀬はその顔を凝視していた。

そうでもない限り、集中をたもってられない。

途中、幾度となく意識が飛びそうになったが、どうにか最後まで持ちこたえた。

正午を過ぎ、広瀬たちはもう学校から出ていた。

今日は特に予定も無いので、まっすぐ家へ向かう。

家と学校は、川を一つ隔ててはば向かい合っている。走って行けば五分かからない

のだが、そこからくる安心感が裏目に出てしまい、家をでるのはいつもギリギリになってしまふ。そのため、いつも全力疾走で通学する。

学校側の道路が国道になっていて、交通量もそれなりに多い。今朝も車列の切れ目

を見計らって渡った。そのときも轢かれそうになったが、高校に入ってから、よくそんなことがある。いままで轢かれなかったのがおかしいくらいだ。

「今日も暇だなあ」

正直、この高校に入った事を後悔している。

中学時代、周りから「百点先生」と、もてはやされるほど好成績だったこともあって、

当時の担任から薦められた、この地域で一番の進学校、さっきまでいたあの高校

に入学した。もちろん推薦で。

ここまでは良かったのだが、入学してからは、ただ、与えられた課題をこなすだけ。

一般的にはそれで良いのかも知れないが、やはり、どうしても何かが足りない気がする。

それはともかく、今日はやけに頭が冴えない。どうしたものか。昨日は特に遅くまで起きていたわけでもない。

「おいっ！危ないぞ！」

何だ、いきなり。

「あ……」

声を出す余裕も無かった。

右側30センチにトラック、か？

完全に思考が停止し、蛇と対峙した蛙の様に立ちつくす。

こうなってしまったら、もう、力に身を任せてやるしかない。

痛みは無い。脳は、電気信号が伝わる前に、機能を停止させている。

第二話（後書き）

誤字脱字に加えて、展開にかなりの無理がありますがあまり気にしないで下さい。

主人公のお名前は、ただネタが無かっただけです><；

第三話

ふいに、今まで立っていた足場が消え、落下した。

パニックになり、自分がどうなったのか理解できなくなる。

なおも落下を続ける自分の体。

ここはどこなんだ。俺は一体、どうなってしまったのだろう。

自問自答しているとパニックはおさまった。

今、落下し続けているこの場所、まっさらで、限りなく澄んでいて、距離感が無く、不思議な感覚だ。光が満ちあふれており、かなりまぶしい。それでいて、風圧で喉や胸を圧迫されるせいか、息も苦しい。

今の姿勢を保っているのが辛くなってきた。

そう思った時、体が落下するのをやめ、空中で静止した。体勢を立て直して、これまでの

状況を整理しようとした瞬間、目の前がひらけースクリーン上に映像を映したような感じに

なった。映し出された映像―空中からの視点で映し出されるその光景は、一人の人間が

大きめのトラックから轢かれる瞬間のものだ。その人間が、広瀬太郎―自分自身であるこ

に気がつくのに、時間はかからなかった。

トラックは10メートルほどさきに停車した。ドアが開き、青ざめた顔の運転手が出てくる。

自分の、無残な姿をさらけだす体の近くには、親友の夕太が立っている。

これで解った。完全に思い出した。

俺はあの時、あまり頭が冴えてなかったこともあって、自分で気づかないまま道路に

でてしまった。そして、夕太の叫んだ瞬間―その時にはもう俺のギリギリ真横にまでトラックがきていて、そのままはねられたてしまった。

「はあ…」

広瀬は嘆息した。

「まさか、俺が死ぬとは…」
込みあげてくる絶望。

「ここへ来た、人はみんなそう言うんですよ」

後ろの方から聴こえたため、即座に振り向いた。

そこには、50代とおぼしき長身のおっさんが、こちらを向き、微笑みながら接近してくる
ところだった。

「あ、今50代って思いましたね。」

当たり。

「はあ」

とりあえず適当に返事をする。

「別に、年齢なんてどうでもいいんですけど、私はまだ49歳ですから。」

正直、少しうつとうしいとは思ったが、それよりも、自分以外に人がいたことに対しての

圧倒的な安心感が、そんな思いを消し去った。

その後彼は、自らをガイド―案内人と名のり、自分に付いてくるように言った。

しかし、それ以上は語ろうとはしなかったため、妙な安心感もあって、よくわからないままだがついて行くことにした。

第三話（後書き）

長くなりそうな気がしてきました><;

第四話

俺は今、案内人と名乗った男の家に向かっている。

案内人の歩行速度がかなり速く、ついに行くだけでもかなり大変だ。そこまで急いで行く必要があるのだろうか。

彼が言うには、その家が結構離れた場所にあるようで、それでいて今急がないと駄目なのだそう。なぜ駄目なのかについては、彼は何も言わなかった。

それに、ここに来た直後は全く気づかなかったが、どうやらこの世界には、昼と夜の区別があるようだ。その証拠に、数分前までこの世界には光があふれていた

が、さつきから、急速に光量を減らしてきている。彼に理由を聞くと、多分、こうなった方がよく眠れるからだ、と言われた。答えになつてないが、あまり気にしない。

歩き続けて30分ほど経っただろうか。突然、彼が歩くのをやめた。「そろそろ暗くなってきたし、疲れただろうか……」

一度言葉を区切った。

「飛びますか。」

頭の上に無数の疑問符が生まれた気がする。

「太郎君、飛べる？」

太郎はかぶりを振った。

「この世界は、やろうと思えば何でもできるから」

予想もしなかった展開に驚きつつ、太郎は言う。

「そんなこと言ってたって、さつき来たばかりなんだぞ、俺」
少し間を置いて、

「じゃあ、私の腕に掴まって」

やはりそうきたか。と、太郎は思った。

とりあえず、案内人の腕をがっちり掴む。結構筋肉質な腕だ。案内人も太郎の腕をしっかりと掴んだ。

案内人が、ゆつくりと深呼吸し、跳ぶ。

「速っ！……」

ジャンプした瞬間、振りおとされそうになったが、どうにか持ちこたえる。

もつとゆつくりと飛ぶものだと思っていたが、実際はまったく違った。

息ができなくなるほどの風圧がかかる。

「さっき言ったことを思い出すんだ。自分が呼吸ができるような環境をイメージするといいよ。」

これは、どうにかイメージできた。言われたとおり、かなり呼吸が楽になった。

冥々たる漆黒の中、空気を裂く音だけが聴こえる。

もう光は一切存在しない。

彼が先に着地した。自分は足ではなく尻で着地。

「ほら、着いたよ」

そう言われて顔を上げたが、何も見えない。辺りを見回すが、やはり何も見えない。

すると、目の前の空間がドアが開いた。それから、中に入った。

中は結構広く、中央には簡素なづくりのテーブルに椅子が四つ。床から天井まで色は白系のもので統一されている。

「着いて早々で悪いが、重要な話があるから真ん中の椅子に座ってくれ」

そう促され、言われたとおり椅子に座った。

「早速聞くけど、自分が死んだってことは解るよね？」

あの映像が本当なら、そうなんだろうと考え、首を縦に振る。

それから彼は、この世界が何か、簡単に説明すると言った。

そこで、ここは、現世で死んだ生命の意識、の存在する場所、要するに死後の世界

といわれる場所であること。この世界と現世は互いに干渉することはない、ということを言われた。

「やっぱり、未練はあるよね？」

それは、もちろんそうだ。特に、友達や家族がどうしているか、心配で気になってしかたがない。

「でも、ここにいるということは、それほど大きな未練を抱えてるわけじゃないね。」

実際、そうだ。未練があっても何かが変わるわけでもないから。この世界に来てから、極力そのことは考えないようにしていた。

「ん？ここにいるということは、ってどういう意味なんだ？」

「未練が大きすぎる者は、ここじゃなくて、もう一つの世界にいつてしまう、という事さ」

それに続けて、

「その世界はことと違って、現世とまったく同質なんだ。そして、現世とは互いに干渉もする。

けど、「同一」ではない。干渉するといっても、現世では一部の人のしか分からないくらい

小さなことだ。その例が、霊現象さ。」

生者が知ることのできない秘密を知った。多少の優越感のようなものを覚えたが、

それには何の意味も無い。

「あ、そうだ。私は何なのか詳しく言ってなかったね。」

そういえば、そうだ。この人物が何者なのか、以前から気になっていた。

第四話（後書き）

少し長くなりました。あまり意味はありませんが。

第五話

「広瀬くんの案内人だってことは話したけど、君と私の関係についてはほとんどはなしてなかった。それで…」

一旦、言葉を切った。

「広瀬くんの前世なんだな、私は。」

「…」

しばらく沈黙が続いた。

「案内人は、その対象の前世が行う仕事なんだ。」

人が死ぬと、普通は生まれ変わることになるんだけど、たまーにだけど、私のように、案内人としてこの世界に留まることができるようになる。どうやって決まる

のかは分からないけど。」

始めは、彼の言っていることの意味がよく分からなかった。

生きていた頃は、そう云う話には全く興味が無かったし、もちろん、自分に前世がいたなんて思ってもいなかった。

しかし、目の前の男は、自分が俺の前世だと言っている。

そこで、彼の話の、一つの矛盾に気が付いた。

なぜ、前世が―彼がここにいるのに俺が存在するんだ。

やはり、彼は、俺が考えていることが分かるようだ。

「それか。そのことは、あまり気にしないほうがいいんだけど、一応説明しよう。」

簡潔に言つと、私が案内人になったのは、ここと違う宇宙でのことだ。そして、この宇宙だと、私は生まれ変わった事になっている。だから君がいるんだ。宇宙は絶えず分岐してるからね。」

とりあえず、なんとなくだが分かった気がする。しかし、そんなこ

とは、もう、どうでもよくなった。

今までの話からすると、俺は、生まれ変わる方の人のようだ。

「そう。君は生まれ変わるんだ。」

「今すぐに？」

俺の質問に対して、彼はうなずいてみせた。

「最後に一つだけ質問。神を信じますか？」
突然の質問。

「信じてない。もしいたら、俺が死なずに済んだかもな。」

「ああ、そうかもね。」

その声が聞こえた瞬間、体が沈みだした。心臓の拍動のリズムが速くなる。

周囲は、一面の暗黒に包まれた。そして、虚無。

絶対の暗黒だ。

だが、そのなかでも、自分の身体が下へ沈んでいくのが見える。そして、身体感覚が無くなる。奇妙な感覚にとらわれた。

分からない、が、何かが自分の身体で起こっているのは確実だ。

その刹那、絶叫にも似た凄まじい音が耳をつんざいた。

そして、静寂。

完全なる闇。

虚無。

第五話（後書き）

本当は死ぬはずでは無かったのですが。

第六話

暗黒。

静寂。

それから、少しあつて、遙か彼方に僅かな光が見えた。それにどんどん接近してゆく。

そして、ものすごい勢いで光に突入した。

広瀬は身ぶるいした。突然、電気が体じゅうを走りぬけ、全身を痙攣させた。

次の瞬間、空気が変わった。唐突に、自分の身体そのものが、それを鮮烈に体感した。

心臓の鼓動。骨格を包み込む肉体。それを下向きに引っ張る重力。足にかかる自分の

重み。刹那、吐き気のするような激しい頭痛に見舞われたが、感じた頃には、激しい頭痛は去った。

強烈だが、どこか懐かしい。浅緑の光が全身をつつみこんだ。顔をしかめ、まばたきをする。

気がつくと、空と陽光の下に立っていた。

肌で、ひんやりとした空気をを感じる。少し湿度が高い。周りをみると、うつそうと茂った木々

が、高々と天に突き出している。それによつて、太陽の光が、心地よい程度に遮られていた。

俺は生まれ変わったはずだ。なぜこんな所にいるのだろうか。

近くで何か音がした。人の声のようだ。その方向に顔を向ける。誰

かが木に寄りかかっていた。

「何か…食べ物…。その…竜人…」

簡素ではあるが、体に甲冑をまとっている。どうやら兵士のような傍らには剣のような

ものが置いてある。

「ん？竜人？」

周りには、こいつと俺以外、人のいる気配はない。

どうやら俺のことを言っているようだ。

体の感覚が完全にもどった。

腕を見ると、そこには柔らかい肌色の皮膚は無く、代わりに、

鋼のように重厚で、薄く蒼味があった、白銀の鱗があった。指の爪は、墨色がかった鉤爪

へと変化している。

腹部は、その部分だけは他と違った風合いの、白い鱗が覆っている。

その鱗は、股間から伸びる尻尾へと続いていた。そこから来る感覚は未知のもので、骨盤を、何も

していないのに揉まれているような感じだ。

そして、顔に手をやる。同じく堅い鱗に覆われていた。上下の顎は前へ突き出し、

鼻孔は上顎の先端へと移動している。耳は、その位置と形を変え、人のそれよりも良く音を拾い、不完全な掴みどころの無い音でさえはつきりと聴こえる。

ここで、眉間より少し上のあたりからまっすぐに伸びるもの、角があることに気がついた。

多少重さを感じるが、気になる程ではない。

西洋竜の特徴とも云える、背中に生える翼が、自分の肩甲骨のあたりにもあった。

身の丈の二倍はあろうかという程巨大で、しなやかだ。だが、動かそうと思っても、全く

制御しきれない。それでも、人間だった時よりも身長が高くなり、

かなり筋肉がついている
のだが。

変わり果てた自分の身体。これが現実だとは受け入れ難かった。完全に、人間として生まれ変わると思っていたので―そもそも、竜人が存在している事自体、とても信じられない。

目の前の兵士は、たべものをくれと言ったが、今、そんなものを持つているはずがない。

とにかく近づいてみることにした。兵士の方も、立っていそいそと歩み寄ってきて、こちらへ腕をのばした。いきなり俺の腕をわし掴みにし―驚くほどの腕力だった―俺の体を

地面にねじ伏せた。兵士の喉から、甲高い笑い声がほとばしった。

そのまま馬乗りになって、鞘から剣を抜く。

「かかったな！まぬけな若僧が！」

そう呟きながら剣を振りかぶった。

よく見ると、後ろの方に2人―仲間だろう、こちらをしつかりと見ている。

どうしていいかわからず、大声で助けを呼ぶ。声をふりしぼって、思い切り叫んだ。

兵士は、思いがけない反応に、きょとんとして剣をおろした。が、すぐにまた、剣を振り上げる。その刹那、すさまじい速さで、何かがこちらに飛んでくる。それが何であるのか、すぐに分かった。竜人が―深紅の鱗をまとった竜人が剣を手に、

それを、まだ気づいていない兵士に向け、大きくひと薙ぎした。兵士の首が鮮血を散らし

ながら高々と宙を舞う。首を失った胴体は、血を噴き出しながら倒れはじめる。白銀の鱗

は、大量の血飛沫を浴び朱に染まった。

死体を押しのけて立ち上がると、深紅の竜人が地に降り、こちらへ近づいてくる。

「この森は野盗が多いから気をつけろって…まあ、その様子じゃ知らなかったみたいだな」

「あ、危なかったあ…」

緊張が解け、深くため息をつく。

「とにかく、この森を出たかったら俺について来るんだな。結構すぐだから、歩いて行くか。」

聞きたいこともあるしな…色々と。」

そう言つと、すぐに歩き出した。このまま一人でいても、ここから出れそうにないので、とにかくついて行くことに決めた。

第七話

なにもかもが、信じられないくらい大きなこと感じられた。

さっきまで居たところは、生い茂る木々の小さな隙間から降り注ぐ光である程度は明るかったのだが、少し歩くと、ほとんどが複雑にからみ合う枝と、その葉によって、段違いに暗かった。これが本来のこの森の姿なのかもしれないが、地面にのびる木の根と、それに生える苔の組み合わせはさすがに危ない。竜人の足の指は前4本に後1本になっていて、案外安定はするのだが、あまりしつくりとこないのだ。そもそも素足でこんな状態の道、歩いたことなんて無かった訳で、ツルツルと滑ってしかたがない。それでも前の竜人は、全く速度を落とさずに進む。

足に集中しすぎて、今度は痛い。太い枝に思い切り頭を打ちつけてしまったが、傷一つ付かなかったのはこの鱗のおかげか。

今までの沈黙を破り、彼が俺に話し掛けてきた。

「さっきから、ずいぶん動きが危なっかしいなあ。さっきの野盗にやられたのか？」

俺はかぶりを振った。

「いや、大丈夫大丈夫。どこも切られてないし…さっきぶつけたところが少し痛むけど」

「そうか、それならいいんだ。」

それから、会話は無くなってしまった。

それから数分後、また彼が話す。

「あ、そういえば自己紹介忘れてた。俺はフェイクス、見ての通り、旅竜だ。それで、お前は？」

そうくると思った。名前は、この際だから適当に言ってみる。

「あ…お、俺は…アステル、よろしく！…ってよろしく？とにかくさっきは危ないところを、ありがとうございました！」

思い切り元気に言ってみた。そういえば、なぜ日本語が通じるのだろうか。

「いやいや、そんな気にするなってアステル。で、お前も旅竜なのか？」

「たびりゅう？」

さつきも言っていたが、初めて聞く言葉だ。

フェイクスは、かなり驚いた様子で言う。

「知らないのか？相当珍しいぞ…まあいい。旅竜ってのは、旅をする竜——ある場所に定住しないで、旅をしながら生活する竜のことだ。俺はまだ、旅を始めて一年も経ってないんだが。」

そう言われたが、イマイチ把握できない。それに、ここに来てからというものの、何か落ち着かない。この奇妙な感覚は、現代にいたころは全く経験しなかったものだ。

フェイクスから話し掛けられるまでずっと考え込んでしまった。彼はいつの間にか立ち止まり、眼前に広がる景色を指差し言った。

「ほら、森出たぞ。で、あっちに見えるのがルフトルの街…だな」
地図を片手に指差す先を、アステルはつぶさに観察した。

堅牢そうなつくりの城塞が真っ先に目に入った。その周囲の街は、高さが10メートルほどある石造りの壁に取り囲まれている。黒っぽい色の石は、歳月を経て暗い灰色になっているが、一角では市壁の修理が行われていて、その部分だけ真新しい、明るく黄色みを帯びた灰色をしている。壁の近くにかがみこんだ石工たちが、せっせと修理を進めていく。

市壁の上には、鎖帷子を着込んだ衛兵たちが、歩き回り、足を止めてはやたらと神経質そうな面持ちで遠くを眺めやっている。

円筒形の黒い石瓦の屋根。周りの小さい塔という塔にはためく旗。城塞はすべての上にそびえている。

城本体は、市壁のさらに内側の城壁に区切られた空間にある。完全に空気が違っているのが、500メートル以上離れていても感じら

れた。

市壁のさらに外側は農地になっていて、農夫たちが畑仕事しているところだ。農夫たちはすべて人間ではなかった。赤や青、オレンジ色やバラ色の鱗が体を覆っていて、背中にはやはり大きな翼がある。その鮮烈さは、黒っぽい農地に彩を与える。さすがに実る作物までは見えないが、明らかに良く見える。人間の目よりも、数倍もハッキリとした、鮮やかな世界が、目の前に広がっている。奇妙な感覚はこれのせいなのだろうか。

そして、いつのまにか先に下りているフェイクスを見つけた。とにかく自分も下りなければならなかった。

真っ直ぐ進んで、そのまま落ちた。ガリガリいわせながら急な斜面を転がり落ちる。

数秒のうちに、体が地面に叩きつけられた。腰をさすりながらあえぐ。

「痛っ……」

あそこが崖になっていいのは予想外だった。

第八話甲

今は……急な坂を転げ落ちている。とても言ってみたいところだが、実際は、そんな余裕なんて全く無い。

始め、少しでもまともな体勢は保っていられたが、所詮あがいてもこの速さだ、3秒も持たなかった。そうなればもう、無駄にあらがうのは止めだ。この際だ、思い切り転がってみることにする、はずだった。

よく分からないが、身体が宙に飛び出した。あまりに華麗な？滑空だったのか——そこは分からないが、とにかく突拍子も無く跳んだ。茫然とこちらを見るフェイクスの姿が一瞬目に入る。

地面に叩きつけられる。肺の中の空気が全て絞り出されるような衝撃。肋骨が凹む。

辛うじて立ち上がり、フェイクスまで歩くつもりだったが、彼の方が来てくれたのでその必要は無くなった。

「何やってんだ？大丈夫か」

「ああ、何とか……」

「まさかあそこで落ちるとは思わなかったなあ……」

「……」

「そうだ、人目も気になるし、そろそろ宿にでも行くか。」

そう言って歩き出すフェイクス。だが、やはり気になるので、聞いてみる。

「宿？俺、金なんて持って無いけど……」

「ああ、それなら大丈夫。さっき無理言って一人用の部屋に二人入

れてもらえるようにしたから。」

両手を頭の後で組んで歩いているフェイクスがこたえた。

「そうか…ありがとな、フェイクス。」

少し歩いて突然、フェイクスが立ち止まる。

「ん。どうした？」

「すまん！ここで待っててくれ！」

今度は突然走り出す。どうしたのだろうか、えらい焦り様だったが。

「ああ、あれか。」

この通りを100メートルほど進んだ先にある広場に人が群がっている。

ここからではよく分からないが、1000人はいるだろうか、上空から見ている人々を除いても（フェイクスもここに含まれる）かなりの人数だ。

フェイクスがこちらを見やっただので適当に手を振った。しかし、反応無し。当たり前か。

明らかに様子がおかしい。焦燥の色を隠しきれていないように見えるが、これはむしろ、隠す気が無いと言った方がいいのかもしれない。

この身体になってしまったから、特に聴覚に関してはかなりの違和感がある。人間だった頃のそれよりも遥かに透明で、今この状況でも、その気になれば誰が何を話しているかを特定できるかもしれない。利点ばかりが増えただけではなく、それまで聞こえなかった雑音が少なからず聴こえてしまい、それが違和感につながっているようだ。

「待つてろ」と言われているし、あまり気が乗らないが……好奇心が勝った。高校生なんてそんなもんだろう。

群衆の間を縫うようにして前へ進む。といっても、この背中の翼が邪魔をし、縫えない。半ば押しのけるような形で進む。すぐに前がひらけた。

群衆の中心、そこには「人間」が横たわっている。気持ちの良いものではない。青ざめた顔からは生気は感じられない。どうやらここに横たわる四人は、指名手配者であったようだ。頭も四肢も付いてるところから、恐らく絞首か。すでに死刑は執行された後、何故群衆に晒されているのか解らない。

「おい、もう行くぞ。」

いつの間にか俺の横に居たフェイスが言った。

俺も、こんなところに長居する気は無い。すぐに宿へ向かう。

「ああ。」

俺はそうこたえた。

暫く歩くと、フェイスの言っていた宿にが見えてきた。外観は比較的新しい石造り。とりあえず中に入った。カウンターにはこの主だと思われる、小太りした竜人が居る。

その竜人はこちらを見るなり言う。

「あんた、その白い方。あんた、もしかして……違うか。まあいい。部屋は突き当たりを左にまがって一番奥の部屋だ。まあ、ゆっくりしてけよ。」

途中で何かを言いかけたのが気になったが、災難が続いて心身共に疲労が溜まっていたこともあり、早速部屋へ向かうことにした。

第八話乙

明晰夢という言葉を知っていますか？ 私は知りません。

ついさつきベッドに横になったまでは覚えているが、どういった経緯でこんな状況に置かれているのか。とりあえずここは冷静に、順を追って考えよう。

カウンターのおっさんから部屋の場所を聞いた後、俺は寄り道をせずにまっすぐ部屋へと向かった。この宿、造りが質素な割に中が広い。もの凄い部屋数で、言われた部屋番号の桁数には恐怖すら憶えた程だ。そう言えば相方はここに泊まるのは3回目だそうだが、番号を聞くと引きつった顔で苦笑していた。

途中、相方とは何も話していない。終始無言で、床の軋む音を聞きながら、言われた通りに二階へ上がり、また少し歩くと目的の部屋へたどり着いた。恐らく20分は歩いていただろう。もう大分疲れていたのも、この程度でもかなり堪えた。

部屋の中に入ると、埃っぽい匂いとやけに簡素なベッドがお出迎えしてくれた。二人とも堪らず咳込む。金銭面の都合上、二つ部屋をとることはできないので結局相部屋することになっていた。

「そうだフェイクス、あのベッドどうする？」

と言ってみたものの相方は何も言わずに俺の横を過ぎ、その勢いのままベッドに飛び込んだ。

その後の事は言わずもがなだが、ベッドの修理代を請求されることになりそうだ。

「嵌めたな……アステル！」

おう、喋った。もちろんそんなつもりは無い。

「嫌な予感はしたけど、まさか壊れるとは」

思っていなかった。口調からして、あまり怒ってはいないようだ。

「まあいい。俺が悪かった。しかし、酷いベッドだな……」

「あの主人に文句でも言ってくるか？」

ベッド代払えとか何とか言われそうだから本当は行きたくない。

「まさか、行くわけないだろ。こんな張り紙もしてあるし」

と言ってその張り紙を俺に投げた。開くと文字が書いてあるのが分かった。読めないが。

フェイクスは思い出すように言う。

「そうか、字が読めないか」

「へ？　だ、誰がそんなことを……」

俺はそんなこと言った憶えはない。しかし、今日の俺を見て予想できなくもないか。

「眉間にもの凄く皺をよせてたが、違うか？　お前ここの者じゃないんだろう？」

「あ、そうか。そんなこと言ったなあ……」

しかしこの文字、日本語のそれとは全然違う。こんなものただのしがない高校生だった俺に読めるはずない。

「実はその紙にはこのベッドの値段が書いて」

「数字かこれ！　こんな複雑な数字初めて見た」

そつえば、文句言いに行かないのこれと、何か関係があるのかな。

「まあ、値札だな」

馬鹿な。こんな代物が市場に出回っててたまるか。

「下に店名も書いてあるぞ」

「なッ！……」

店名と値段の区別が付かないのだが……どうしよう、この世界で生活していける自信が全く持てない。

「この店もしかして」

と言ったところで詰る。眼を見開いているところを見ると、何かマズイことでも思い出したようだ。

5秒くらいすると、次は呟き始める。どうやら大変な事になってしまったらしい。

「大丈夫か？」

流石に心配なので声を掛けたが、聞こえてない。

「アステル！ お前は来るな、ここで待ってる！」
「な」

「出掛けて来る。用事を思い出した。」

そう言い残して、すぐ飛び立った。この部屋には結構大きな窓があるのだが、そこから出ていった。床には木とガラスの破片が散乱している。

フェイクスは窓の修理代も払いたいらしい。

第八話丙

フェイクスがどこかへ行ってしまったて30分はただだろうか。

部屋の中は、彼の壊した窓の破片が辺り一面に拡散し、少なくとも人が寝れるような状況では無い。だからこうして起きているのだ。

一応、超硬質の鱗のお陰でガラス片ぐらいなら上に寝ても何でもないのだが、何故かすぐに背中がこそばゆくなって堪らない。だからこうして窓の縁に腰掛けている。

背中 of 翼に当たる風が心地よい。翼は、いつの間にか身体の一部となっていた。初めから自分の身体に付いていたモノだが——いや、人間だったころは勿論、翼など付いてなどいなかった——思うように扱えなくてもどかしかったし、正直なところ邪魔だった。しかし、この30分で全て変わった。とにかくこの翼を動かせないものかと思ひ、あれこれ試して30分。多少挙動に不安が残るものの、何とか実用に堪えうるだろう俺の翼が出来上がった。少なくとも暑いときの団扇の代用を任せる事はできるはず。

率直なところ、身体の一部になったかと言えば疑問が残るのだが、それでも、動かせるようになったことは事実なので、飛ぶための訓練も兼ねて実際に動かしてみよう。

無理だ。いや、部屋が狭すぎるのだ。どう考えてもこの、人間が普通に宿泊するのがやつの広さの部屋でこの翼は動かせまい。それこそ取り返しのつかない事になりそうである。

ならば下に降りる他無い。ということで、窓枠に手を掛ける。身を乗り出す。

「（ガッ）ふぐっ……」

引っ掛かった。おかしい、フェイクスはすんなり（窓を割って）出

れたというのに。何かコツがあるのだろうか。それとも体格？　どちらにしろ、とりあえず窓は諦めようと思う。

そうなるともう出口はひとつしかないワケで……正攻法が悪いとは誰も言っていないだろう？　ということで、ドアへ向かう。眠い。

「くそつ、抜けない……」

向かえない。眠い。視界のぼやけ具合もそろそろ佳境へ入ろうとしている。もうまぶたなんて閉じてしまえ。

諦めると途端に睡魔が襲ってきて、体の動きも緩慢になるわ、思考もろくに出来ないわでもう大変。この体勢のまま寝るのは避けたいところだがそろそろ限界だった。身体に力が入らない。もう、意識も朦朧としてきました。あつちとこつちを行ったり来たり……している、体が抜けた。外側に。重力加速度はどこに行っても同じだな。

「ぶぐつ……」

一回転して頭から落ちた。首から変な音が聞こえたが気にしない。と言っても、とてもとても痛いので否でも意識してしまうか。ここは平屋だが何故か高床式で、平屋ではないか。2階建ての一般住宅程度の高さがあるのだが、今ほどこの設計者を呪うことはこの先無いだろう。他の家屋は真面目に地べたに建っているがここだけ何故か高床式。絶対に設計者は捻くれている。

このまま寝るのもどうかと思うので、立ち上がる。いくら人間よりも強靱な竜人といえど、2階（相当）の高さから（頭から）落ちれば只では済まない。実際に落ちた俺が証明しているのだ。身体に障害が出たりしたら冗談にもならないが、どうやらそれは大丈夫らしい。今度医者に見てもらおうかな。

上を見ると俺の落ちた窓がある。飛べば届くと思うが、団扇で飛

べるはずもない。しかしここは高床式だ。下を潜れば入り口に行くことなどたやすい。早速行くでしょう。

「お、あれは……」

歩き出したその時、見つけた。あれはフェイクスだろう。どうやらず子連れのようだ。

第八話丙（後書き）

恐らくこれで八話は終わりです。分けた意味は特に無いです。

第九話

子連れの竜人が目の前にいる。目の前といっても少し距離があるが。

しかし、なぜフェイクスが小さな子どもを連れているのだろうか。暗くてハッキリとは分からないが、あれは人の子だ。この町に来てまだ一度も人の姿は見ていないし、てっきり竜人しかいないのかと思っていたが、どうやら違うらしい。

その事も含めてフェイクスには訊きたいことが幾つかある。今のところこちらには気付いていないようなので、彼らの元へ向かうとしよう。

それにしても彼らはこんな場所で何をしているのだろうか。何か話をしているわけでも無さそうだが、まさか、あいつの子どもとか言うオチなのだろうか。それは無いよな。そうであった場合、どうも複雑そうな背景が見え隠れするようになって近寄り難い雰囲気が出るため、こちらとしては無い方が嬉しい。

と、言うわけで、今から声を掛けてみよう。ま、別に大丈夫だろうと俺の勘も言っているわけだしね。

出来るだけ足音を抑えつつ慎重に前へと進む。背後から行けば先ず気付かれまい。強烈なバックスタブをお見舞いしてやるぜ！ というのは冗談だ。

フェイクスの肩を軽く叩く。

「おい、こんな所でなにをしている。」と、言ったのは俺。

「やあ、アステル。おやすみ。」と、言ったのはフェイクス……ではなく前の方にいるはずの子どもだ。何故「おやすみ」なのか。どうでも良いが、髪の長さからして女だ。

と、考えていると、体が痺れた。直ぐにそれが頭まで回り立って

いられなくなつた俺は地面に倒れる。意識も風前の灯火といった有様で、もう目を開けているのもやつとだ。また子どもがなにか言つたようだが聞き取れない。すると頭に痛みが走り、視界が混濁して、終いには真っ白になつた。

今起きたところだ。今のところ身体に異常は見当たらない。周りを見る限り室内の様ではあるが、寒い。外よりも寒い。そして、裸は一段と寒いので堪らない。

この状況を把握しておきたいものの、何せ情報が少ない。特に視界からの情報が少ないというのは致命的だ。部屋の広さはおよそ四畳半で窓も扉の無い。ただ中心にベッドがひとつ有るだけ。生前の自分の部屋を彷彿させる殺風景だが、俺の部屋には窓も扉もある。凄いだろ？

まあ、それは置いておくとする。結論から言うと、これは夢だ。勝手に動けるところからすると、明晰夢とか言うやつだと思う。ただ、好き勝手に動けるといっても物理的に厳しい事はさすがに出来ないらしい。ちょうど今壁を破壊出来ないか試みたが、俺のタツクル程度ではびくともしない。夢という割には体の感覚もハッキリしていて、痛みも当然のように感じる。そういえばぶつけた右肩に強い違和感を覚えたけど、一体どういうことだろう。

一応、関節がくっついていている事を確認したし、とりあえず、もうやる事が無いという状況だ。夢の中でこれはどうかと思うが、寝るか。

そそくさと横になると、さっきの子どもがいた。「わっ！」思わず叫ぶ。すると――

「耳元で大声を出さないでもらいたいんですけど。」

喋った。てつきりマネキンか何かかと思つてたが違つようだ。眉間に皺を寄せた顔をこちらに向けて話しかけてきた。

「また会いましたね。」

「あれは会った内に入るのか？」

一瞬視界に入っただけで気が失いました。俺はその意味で言っただけだった。

「そういう意味じゃ無いよ。もう少し前に会ったはず。」

と、言われ、記憶を洗ってみる。あれより前となると、宿の店主と死体と盗賊とフェイクスさんぐらいだと思いが。

「惜しいところまでいったけど、もつと前。」

と、言われる。どこが惜しいのか分からないが、突っ込まずに思索する。もつと前か。ふと、ベッドの横に何もせずこちらに背を向けて立っている少女を見る。こんな子ども近所にいたかなあ、とか考えてみる。出来る限り生前（とは言っても今も生きているが）の事は忘れるように努めているが、仕方が無いので今例外という事にした。だが、そもそも記憶は、主に脳に詰め込まれている筈だから、思い出すというのも可笑しな話かもしれない。そうなると幾ら頑張ろうと思いつけないというのは自明の理、実際に今思い出せないわけ、諦めて、ベッドに腰掛けて足をぶらぶらさせている長髪口りっ娘に話す。

「違う。」と言われる。何がだよと言ったが何も応えない。ぶらぶらは飽きたのか、今度は足をくるくると回し始めた。

何をしようと思いつけないものは思い出せない。もうそれは諦めだし、また暇だ。チビっ子は足を回すのに夢中で、話しかけても無駄だろう。と、なると、寝るしかないと思います。

そして、今回は無事に横になれた。仰向けになる。すると、本来は天井が有るはずの場所に、何も無いことに気がついた。道理で寒い筈だ。見ると、空も何も無い、ただ黒いだけの空間があった。夢だからなのか、不思議と違和感を感じない。痛みは過剰に感じるのに、こういう部分だけ夢らしく振舞う。そんな事を考えていると、体が重くなってきた。

横にいるチビっ子が立ち上がって奥に行くのが見えた。その体は

すぐに見えなくなつたが、音は聞こえる。

何か重いものを動かす音。そして、チビツ子のものであろう足音がこちらに近づいてくる。戻ってくるのか。

予想通り、チビツ子は戻ってきた。ただ、行く前と違うのは、体の横に抱えているモノである。

それは、チビツ子の身の丈よりも長く、傍から見るとかなり不釣り合いに思える。しかしチビツ子は重そうな表情ひとつ浮かべずに、むしろ余裕すら漂わせてこちらに向かってくる。

目が合った。チビツ子が微笑む。つられてこちらにも表情を緩ませるが、背中からは嫌な汗が出そうだ。

「やあ。」と、俺が言う。

「面倒くさい。」と、彼女が言う。

全く会話になっていない。ならば――

「それ、何に使うの？」無視に屈してはならない。

「自分で起きられないのなら、私が起こす。」

今度はそう言って、チビツ子は、バレットM82――対物狙撃銃です――を、俺の眉間に突きつける。

第九話（後書き）

いつの間にか二年目突入してました。しかし、まだ導入部という神憑り的な執筆の遅さですので少しテンポ上げましょうか。

第十話

水。それは、生物の生命維持に欠かすことの出来ない物質。その水が体内に於いて不足した状態を脱水と呼ぶが、まさに今の俺はその状態だろう。

幾ら夢の中といえ、この背中から流れ出る汗の量を見る、それはもう尋常ではない。これが現実ならば救急車を呼んでいるところだ。まったく、近くに電話が無いことが悔やまれる。

さて、何故俺はこんなにも発汗しているのかというと、原因は後ろに立つ少女にある。この少女がいたい何者なのか、俺には心当たりが無いと言えは嘘になるが、あの一瞬では顔を見るのが精一杯しかし少女当人は俺を見知ったような口を利く。どうも納得が行かないが、今はそれどころではない。

「水分が……」

足りない。と、言おうとした時、頭の中で鈍い音が響いた。どうやら後ろの少女が俺を殴ったらしい。昨日今日で殴られるようなことをした覚えはないのだが、ストレスが溜まっているのか先程から何か発言するたび殴られている。本当は水分の確保より後頭部の保護を優先すべきなのだろう。しかし、のどが渇く不快感が痛みよりも勝っている状態を加味すると、水分の確保の優先度がわずかに上回った。

「よしっ」と、声を上げ立ち上がった。後ろを向くと、少女が銃を振りかぶっているのが目に入った。俺はとっさに銃口を横に向けさせ、とりあえず脇腹に蹴りをお見舞いしてやる。蹴りが命中し、少女はバランスを崩しふらついた。今のうちに走るのもいい手だろう。しかし、銃を持ってるいられるのは厄介だ。一か八か、銃身を両手で持ち、思い切り引つ張った。対物狙撃銃は少女の手を離れる。思惑通り、バレットM82を奪い取れたところで、俺は駆けだした。初めのうちはよかった。いくらこの銃が重いとはいえ、ここは夢

の中で、体力も尽きることはない。いくらでも走り続けられると高を括っていた。しかし、走り出して五分も経たないうちに息が切れ始め、十分後には地面に突っ伏して、干からびかけていた。

敗因は、脱水によって体力が消耗していたことを忘れていた事だろう。結局、水分確保のために逃走したはずが、さらに水分を失う羽目になった。

「馬鹿だね。」と、極めて軽い口調であの少女がつぶやく。

待て。すぐに失速したとはいえ結構走ったはず。どうして俺の隣に奴がいるのだ。追いかけられている感覚は無かった。

「お前、どうやって追いついた。」と、うつ伏せの体を起こしつつ俺は言った。

「んー……ワープ？」

「ワープ？とか言われてもな、俺が分かるわけ無いだろ。」

「確かに。ご尤もですね。ま、これが夢であることを考えればあり得ないことでもないと思うよ。」

少女は俺の頭を撫でながら話している。そういった仕草は少女そのものと言えるが、超然としている態度は、見た目とはかけ離れている。この人間が何者なのか気になる。殴られることを危惧しつつも、俺は真っ向から質問をぶつけることにする。

「一つ聞いても良いか。」

「ああ、何でも質問するが良い。」

口調がおかしいが、気にせず質問するでしょう。

「ここはどこ、あなたは誰。」

質問は二つだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5461b/>

限りなく透明ではない

2010年11月23日04時10分発行